

第2回 豊岡市立小中学校適正規模・適正配置審議会 議事録（要旨）

- 1 日 時 2020年7月1日（水） 14時00分～16時30分
- 2 場 所 豊岡市役所本庁舎 3階 庁議室
- 3 出席者 ≪委員≫（委員名簿順）
浅野 良一会長、中川 茂副会長、西谷 佳代委員、中島 章博委員、河本 美佳委員、西垣 浩文委員、宮崎 裕紀委員、二方 道正委員、平尾 洋委員、澤田 雅子委員、小田 知子委員、高階 正夫委員、増田 克志委員、加藤 勉委員、綱木 直美委員、貝口 志保委員、藤田 明治郎委員、木村 尚子委員
（欠席）なし

≪事務局≫
嶋 公治教育長、堂垣 真弓教育次長、飯塚 智士こども教育課長、木下 直樹こども育成課長、永井 義久教育総務課長、木之瀬 晋弥参事兼課長補佐、野崎 律男学校再編推進室長、細田 正徳係長、太田垣 輝尚主任
- 4 傍聴者 非公開につき傍聴者なし
- 5 主な内容
 - (1) 挨拶
浅野会長から挨拶
※内容については、「6 主な発言内容等（要約） (1) 挨拶」のとおり
 - (2) 議事
 - ア 報告事項
 - (ア) 市の現状について（資料1～資料6）
 - (イ) 他市の適正規模・適正配置の考え方について（資料7）
 - (ウ) 「豊岡市における幼児教育・保育及び放課後児童のあり方計画」について
 - (エ) 極小規模校の授業風景について（ビデオ視聴）
事務局より、資料・ビデオ映像をもとに説明を行った
※委員からの質問等については、「6 主な発言内容等（要約） (2) 報告事項に対するの質問等」のとおり
 - イ 協議事項
 - (ア) 本市における望ましい適正規模・適正配置について（報告事項に対する意見交換）
 - (イ) 地域別意見交換会の開催方法等について
※委員からの質問等については、「6 主な発言内容等（要約） (3) 協議事項」のとおり
- 6 主な発言内容等（要約）
 - (1) 挨拶
≪会長≫
2月にお会いしてからかなり日が経ちましたが、まだ、今年度答申に間に合う時期ですので、これから議論を尽くして前に進めていきたいと思っております。私も、今回、コロナに関して感じるものがいくつかありました。1点目は、学校はただ勉強して学ぶだけの場所ではないと

ということです。今回の課題でもある、社会システムの中の有力な一員であるということです。私たちがそこに意見を出し合いながら決めていくことになる、非常な重要な会議だと思いました。2点目は、この会議は、学力向上の会議や教育振興計画を決める会議などと違い、途中で訂正ができない、後戻りができない会議であるということです。決めたらそれで行くという、非常に重要なターニングポイントの会議となります。その辺も気にしながら進めていきたいと思います。3点目として、我々はカウンターパートであることです。教育委員会の原案に当たり前のように賛成するのではなく、ここは気になるぞ、これはどうなんだと、前向きに、批判的に見ていくということです。批判をして潰すのではなく、我々もカウンターの向こうに立って、今回の議案を慎重に見極めることが重要になると思います。ぜひ、今日も含めて、今後充実した会議になることを期待して、私からの挨拶とさせていただきます。

(2) 報告事項に対する意見・質問等

《会長》

事例として他市の適正規模・適正配置の考え方を見ると、子どもたちに対する教育が適切かどうかという観点と、学校の運営面、教職員がその中で仕事ができるか、そのあたりがチェック項目として出ているような気がする。

《会長》

複式で2つのクラスを1人の先生が見るわけだが、教科は同じ教科をするのが原則なのか。

《事務局》

特に同じ教科をしなければならないということはない。

《会長》

1年生を含む場合は8人以下、他の学年は14人以下、これはいわゆる標準法（公立義務教育諸学校の学級編制及び教職員定数の標準に関する法律）でそれだけの教員しか配置してもらえないということでしょうか。

《事務局》

そのとおりである。

《会長》

ビデオで見たような支援員は市費で配置しているということか。

《事務局》

学校では、少人数で複式学級のある学校で研究をするという目的で、県費による加配をいただいている。非常勤加配であり、フルタイムではないので時間が限られており、毎日来られるわけではない。また、例えば3・4年生だけが複式学級であれば、非常勤加配の先生がその学級の対応ができるが、例えば1・2年、3・4年、5・6年と全ての学年が複式である場合、その先生はそれぞれのクラスについて、時間配分を計算しながら対応しなければならない。したがって、複式学級では、一方のクラスに対応している時間はもう一方に入ることができないため、必ず補助の先生が入るというわけではない。

《A委員》

複式学級とそうではない学級で、学力差とか、データをとったようなものはあるか。

《事務局》

学力の調査に、全国学力学習状況調査というものがある。A問題が基礎・基本の定着度をみる問題で、その部分に関しては、一般的には少人数の学校の方が高いと言われているが、学校別のデータは公表していない。ただ、我々が気にしているのは、これからの時代に求められるコミュニケーション能力であったり、基礎的な知識や技能を様々な場面で活用する力、このあたりは少ない人数では育ちにくいのではないかと心配している。現状としては、数値で測ることのできる学力だけを見れば、本市においては人数の差によって大きくは変わらないように感じている。

《A委員》

授業時間は半分なわけで、それによる影響はないか。

《事務局》

先生が直接指導に関わっている時間が半分なので学力的に影響が出ないかということについては、特にそういったデータはない。

《教育長》

そこはすごく大きな問題で、きめ細かにできるので、例えば漢字をたくさん覚える、計算能力を高めるということには有利である。一人一人に適した指導の時間がたっぷり取れる。そこだけ見ると、「問題ない」、「小規模のほうがいい」、という話が出てくる。しかし、これから求められるのは学力だけではないということ。そこを理解してもらうのがなかなか難しい。

《B委員》

複式学級の様子を見てしまうと、非認知能力のない児童にはちょっと無理ではないかと思う。集中力がなければ授業にならないし、ほっておかれてもやり抜く力がないと授業にならないという印象を受ける。大人でも後ろで違う話をされていたら集中することはなかなか難しい。これを見ているとかなりストレスが溜まるのではないかと感じる。このビデオを見せたら、将来こうなりますよという小学校区の方は、みんなひっくり返るのではないか。かなりインパクトを受けた。実際、ストレスチェックで反応するものなのか。

《教育長》

このことによるストレスをチェックしているということはない。よく、「子どもは慣れるのが早い、だから複式でも構わない」という発言もある。しかし、一番のポイントは、発達に特性があり集中力に課題を持つ子どもたちもかなりの数いて、そういう子どもにとっては、あの中にいると工事現場の中で何か言っているように感じる。だから（教室を）飛び出すかもしれないし、学校に行かないと言い出すかもしれない。そういう子たちにとっては余計にストレスがかかることは容易に想像できる。そういう診断が出ていなくても、そういう傾向がある子というのは、委員が言われるような心配がある。

《会長》

私も何回か複式学級を見たことがあるが、せいぜい学年の間をホワイトボードなどで簡単な仕切りをするくらいで、声は必ず聞こえる。

《C委員》

ビデオを見せていただいて、自分が何をやっていいかわからない子たちは、課題が終わったら、ぼ～っとしていた。そういったところで気が散りやすいのと、上級生はすでに習ったことを後ろでやっているの、かなりストレスがかかるのかなと思った。先生についても2つのことを同じ時間にやらないといけない。学年で頭を切り替えなければならないので、子どもたちもストレスを抱えると思うし、むしろ先生の方がストレスがたまるのではないかと思った。先生に対してもストレスなどを聞いてもらった方がいいのではないかと思った。

《事務局》

確かに、複式学級だからということでストレスチェックはしていないが、教員全員にはストレスチェックをしている。ただ、今言われたように、違う学年の直接指導を交互にするため、頭の切り替えや教材研究の大変さがあり、経験がなければ、誰でもできるというものではない。できる限り複式学級の指導経験がある先生を複式のある学校に配置する事も配慮しなければならない。

《D委員》

今回、コロナ禍で休校措置の後の対応について、大規模校とそうではない学校とでは、学校での対応に差があったか。例えば、解除後、全員が普通どおりに登校できたのか。大きいところは分散登校をせざるを得なかったと思う。小規模の場合は、ある意味、普通通りに戻るのも早かったのではないかと思うが。

《教育長》

その通りで、分散登校は、休校中の週に1回、2回の登校日に分散登校をしていた。例えば大きな学校は、地区ごとに2つか3つに分けないとできないという状況だったが、小規模校は一度にできる。しかも1つの教室に数名しかいないから密にはならない。そういうメリット、デメリットが今回ははっきりでていた。ただ、今回のことは日常的にこれからずっと行うものではなく、コロナ対策に関してはということ。

《D委員》

ビデオを見させていただいて、もちろんデメリットも多々あると思うが、非常に贅沢だと率直に思った。少人数の学校の方がむしろ、基礎学力が高い傾向にあるとのことで、もちろん、一番基礎学力も大事なところではあると思う。最初の会議の時に、複式学級はいいか悪いかというと、教育委員会としては、これから複式学級の解消をしていかなければならないと言われていた。そういう課題がある一方で、先生を少人数で独り占めできるというのは、少子化の中で、また、個別対応が必要な子どもが増えていく中で、どこかの形でああいう対応を増やしていく必要があるのかなと、ビデオを観て思った。

(3) 協議事項

ア 本市における望ましい適正規模・適正配置について（報告事項に対する意見交換）

《会長》

「豊岡市における子どもの現状や将来の見込み」、「他市の学校適正規模・適正配置の基準」、

「本市で検討が進められている幼児教育・保育のあり方」についての説明と、先ほど見ていただいた、小規模校の、特に複式学級の状況のビデオの視聴により、今置かれている本市の現状をある程度共有いただけたかと思う。この審議会は、最終的に豊岡市として学校適正規模・適正配置はどうだという答申を行うことになっている。もちろん、結論を出すのはまだ先だが、望ましい適正規模・適正配置については、次回以降、この会議で継続して審議をしていく。ここまで説明を受けた中で、あるいは事前に送付された資料について、意見や感想などお聞かせいただき、議論を次に繋げていきたい。

《E委員》

初めて複式学級の授業の様子を見させていただいた。半分が自習で、半分が授業を受けている状況で、自習は家でもできるのではないかと、時間が少しもったいないのではないかと考えた。とよおか教育プランにある「非認知能力」を育成するには、人とのやり取りが大事だと思うので、この人数のクラスよりも大きいクラスで人と意見をやり取りする、学校でしかできないコミュニケーションが大事になってくるのではないかと考える。そう考えると、資料にある通り、非認知能力を育成するのが難しい学校が出ているなど実感した。子どもたちにとっても、いろいろな人間関係を構築することや、いろいろな意見、「こんな意見があるんだ」ということや自分と違った意見を受け入れることも大事だと思うので、そういった子どもたちが切磋琢磨できる環境ができたらと感じた。

《F委員》

ビデオを見て、「本当に複式になったんだな」、「子どもがこんなにも減るとは…」と思った。今、独身の方に話を聞くと、結婚をしたくないという人がすごく多い。理由を聞くと、一人で気楽に生きていたいと言っている。子どもを産んでもお金がかかるし、気を遣って、お金も使って、最後には親は勝手に生きていけという感じで、子育てに全く魅力を感じていない。未婚の若者が多くなると、少子化がますます進んでしまう。これから先には、1、2、3年生が一緒の教室で授業する時代がくるのではないかと、とんでもない時代がくるなどと思った。やはり1学級40人くらいの児童の教室なら、いろいろな面で人間形成ができていくと思う。特に今は人付き合いの苦手な子どもが非常に多い。子どもの頃に群れて遊んでいない。異学年の子どもたちと一緒に遊んでいないことが原因ではないか。子どもたちが人と話せない、人付き合いが苦手ということもあって、不登校となる原因もある程度はそこにあるのではないかと気がする。人付き合いがうまくできている子どもたちだったら、勉強の得手不得手ではなく、学校に来ると思う。これから先、ますます人数が減ってくることが恐ろしいなど、そう感じた。

《G委員》

それぞれ地域性があるだろうから、それを基にみんなで考え、豊岡全体として考えていくのがいいと思う。例えば、竹野地域では、中竹野小学校は竹野小学校に早く統合して欲しいという意見が多いように聞いている。一方、竹野南小学校は、少人数で複式学級があるが、数年前に森本中学校が竹野中学校に統合したばかりであり、竹野小学校との統合は考えて欲しい

ないという感情的なものがあるように思う。また、地域コミュニティの核として竹野南小学校への期待が非常に大きいのではないかと。さらに、竹野小学校まで10 km近くあり非常に遠いというのが実情である。しかし、よく考えたら子どもたちは6年間、今のような少人数で暮らしていかないとはいけない。6年間を複式で暮らさないとはいけない。年数が非常に長すぎると思う。地域の感情も確かに大事だろうが、ここは子どもの実態、子どもを中心に考えていくべきではないかと考えている。

《H委員》

小規模校の子どもたちの学力は劣っていない、かえって良いという事だが、学力だけで子どもの成長はいいのかという事をまず危惧した。何人かの中で一緒に、大人数でしかできないことがあるのではないかと、複式のままでいいのかと感じた。今後統合に向けての考え方をどのように検討するのかということだが、すでに、五荘小と奈佐小、港西小と港東小、という事例が現に動いている。地域の自治会やPTAやコミュニティが、いろいろ、自主的な話し合いをされてきたのではないかと。例えば、奈佐はもう限界だという意見がどこかから出て、じゃあどうするのかという話から動いてこられたのではないかと、行政がトップダウンでやっているのではないかと。それなら、せっきやく29のコミュニティがあるのだから、コミュニティを核にした形での自主的な話をしてもらうことの必要性が今あるのではないかと。小規模校から住所を街の方に異動させてでも学校を変えるという家庭が実際にあるので、このままでは小規模校はさらに小さくなるが見えている。行政では、トップダウンであったり、説明会をどんどんやっていくのが本来なのだろうが、やはり地元で協議していくことの必要性を最近考えている。

《I委員》

初めて複式学級の様子をビデオで見て、ちょっと衝撃的だった。そして、基礎学力は高いという事実も衝撃的だった。保育士をしていた経験上、子どもがこの年齢の時に経験をしないとできないことがたくさんあると思う。小学校の6年間でできない部分がたくさんあることは、とてもマイナスで、例えば理科の実験が複式ならできにくいとか、自己表現をする場面について、30人のクラスで学んだ子どもたちと差あるとか、中学校、高校に行ったときに経験していないが故につまずききっかけにならないかなと思った。同じようなことを、保護者からも聞くことがある。これまでは少人数であったのが、大きなところに行ったときに、例えば高校に行くと差がすごく大きい、つまずきがあると。極端かもしれないが、引きこもりになるきっかけになることもあるのではないかと。大事な子どもたちが学ぶ時期、年齢はもっと大事に考えていきたいと思う。複式は仕方がないというだけではなく、他の手立てがないかなと思う。

資料1の学校別児童数を見て、明らかに港西、港東の人数よりも中竹野、竹野南の人数が少ないにも関わらず、どうしてここからは統合の要望が出ないのか、統合に向けて動けないのかと疑問に思っていたが、先ほど他の委員から説明をいただいて、その理由が良く分かった。統合に動き出すためにはどんな条件があるのか、要望書を揃って出してもらわないと動けないのかについて質問したい。

《会長》

統合に向けて動き出すためにはどういったアクションが必要であるかの質問があった。答えられる範囲で答えをお願いしたい。

《教育長》

竹野地域の場合は、先ほど言われたように、竹野南小学校でいえば、今の学校でさえ距離が遠く、8 km、9 kmを通っている子どもたちがいる。それがもし竹野小学校に行くことになると、さらに距離が遠くなる。そのことをすごく心配されている。それから、昭和 62 年に 4 校が一緒になって現在の竹野南小学校ができたという経緯があり、年配の方はこれで私たちの統廃合はないだろうという思いがあったように聞く。そういった、地域的な背景が確かにある。就学前、子どものお持ちの保護者の方は、もう統合が必要な時期であると、多くの方が思われているのではないかという感触はある。ただ、タイミングはいつが良いのかという問題はある。

統合までの段取りについては、別の担当者から説明する。

《事務局》

統合に向けた段取りについては、事前に、他の方からも質問をいただいている。港東、港西と奈佐はどこが主体となって取りまとめがなされたのかという問いであった。奈佐については、地域の人口減少や高齢化の問題について、地域の中で検討をする会議を持たれていた。2017 年にできているが、その後協議を進める中で、存続、統合も含めて学校のあり方について考えていかないといけないということで検討され、2019 年 3 月に「奈佐小学校を考える会」を作られた。そこから協議を始められて、P T A を巻き込み、最終的に地域と P T A が一体になって昨年 12 月 3 日に要望書を提出された。地域独自で研究や検討をされていたことが元かと思う。港地区については、港西小学校 P T A から港東小学校 P T A、港中学校 P T A に、「統合について考えたいのだがどうだろう」と打診があり、小中 3 つの学校で検討を始められた。その後、港認定こども園も含めて、P T A 主体で動かれて、最終的には P T A でとられたアンケートの結果を持って、地区に対し、港地区全体で考えて欲しいという要望書を提出された。それを受け、地区でも検討され、P T A の意見を尊重され、最終的に、港地区と P T A 合同で要望書が提出された。

統合に向けて動かれたきっかけとなる主体は地域と P T A ということで、奈佐地区と港地区それぞれで異なるが、最終的には両方とも、地域と P T A の意見が一致し、要望書を提出いただいた。

《J 委員》

ビデオで見ていただいた学校の P T A 会長を昨年させていただいた。皆さんがどのように感じられたかは、反応を見ていてわかったが、私も実際にその現場を見て、これではダメだと率直に思った。地区では年々児童数が減ってきていると感じていたが、統合に向けた話が出ては消え、出たは消えという状態であった。その理由としては、P T A は単年度制で、話を起こしたとしてもその年度で完結せずに終わってしまうだろうと、なかなか動きができなかったことにあると思う。その背中を押したのが、ビデオで見ていただいたように、いよいよ複式になった現状、姿を見て、非常に危機感を覚えたからである。P T A 会長になり最初の港地区の合同 P T A 会議の中で、港東小、港中学校の P T A 会長に、「統合について検討したいのだが

どうだろう」という話をした。港東小も統合しなければ数年後に複式になることがすでに決定していたので、前向きにやっていかなければならないという思いが共有でき、将来の子どもたちのことを考えて、何よりも地域の将来を考えても、今動かなければならないと、検討をはじめたものである。地区にはどうしても、昔のことばかりを言われる方もある。地域を愛されている表れだが、その方々にどうすればわかっていたいただけるだろうと考え、まずPTAの中で現状を聞くためのアンケート調査を行い、その結果を基にPTAの保護者を対象とした意見交換会を2、3回行った。集計の結果は、ほぼ9割が統合賛成の方向の回答が得られたので、それをもって区長会に地域全体で検討してもらおうよう、要望を行った。思っていただけでは何も変わらないので、勇気ある一歩をやらざるを得ない状況であった。

《K委員》

今お話を伺って私の疑問はだいぶ解消された。地域のお母さん方は、我が子のことなので、関心がある方は複式学級だけは避けたいと言われる方が多い。資料を見て、港東小学校、港西小学校や五荘小学校、奈佐小学校の統合準備委員会だよりも実際に出ているのを見て、ここまでするにはどうしたらいいのか疑問だった。たとえば、但東地域は、3つの地域が一緒になって動かないと、統合することができないのかと疑問だった。今話を聞いて、PTAなりの団体が動いて、地域に上げて、まとまって意見を一つにして市に上げないとここまでするには至らないということが、とてもよく分かった。ビデオを見て、皆が思われたように、但東のPTAでも実際にビデオを観れば、「どっちでもいいかな」と思っている保護者の考えも、きっと変わるのではないかという感想を持った。資料の人数を見れば、自分の子どもが複式学級になることは一目瞭然であり、もう少し動かれるスピードが変わるのではないかという感想です。

《L委員》

資料を見ての感想だが、1点目として、複式学級のビデオも観たが、複式はできれば避けたいという思いである。統合の流れが全体的に迫ってきているとの感じを受けている。地元の地域では、統合に向けての検討が始まっているが、伝統的に培ってきた小学校なので、地域のことをしっかり受け止めて、十分納得いくような統合に持って行きたいと思っている。やはり統合ということが避けて通れないのかなという感想を持っている。養父市の関宮学園があるが、あれがひとつのモデルかなと思う。もう1点、中学校の部活動の資料があった。私が知らなかったただけだが、部活動についてはびっくりした。数はわずか、しかも文化部は無いに等しい状況である。私の中学校時代はもっとたくさんの部活動があったのになと思う。多様な関心や興味が育つ場所なので、それに入れたら良いと思うが、悲しいかな生徒が少ないのでできない。中学校にも課題があるなと思う。私の地域では、毎日、複式学級で現に授業をされているが、いつまでもこの状態でいいのか、誰の責任なのかと思うこともあり、なかなか難しい問題だが、問題として声をあげなければ、ひとつも前に行かないと思っている。

《A委員》

統合準備委員会だよりも見て、こんなに早く進むものなのかと思い、そこに至るまでかなり時間をかけられたのかなと思うが、1年ちょっとで統合するというのを見ると、皆さん勇気

が出るのではないかと、1つ、2つ事例が出て、こういう歩みをされたということは統合を考えておられる地域には勇気がもらえるのではないかと思います。先ほど、会長が、我々はカウンターパートであるという話をされたので、その立場として話をさせていただくが、私も複式学級の様子を見てすごいと思う、統合していくべきだと思う。どうしてもこういう問題は自分の感覚で考えてしまうので、「多い方がいいはずだ」という感覚で考えてしまうが、実際にどうなのかということをしちんと突き詰めながら進めていただきたいと思います。例えば、今、不登校が多いと思うが、大規模校の方が少ないのか、大規模校だったらそう言った問題が少なくなるのか。小規模校から卒業したほうが大人になった時につまずいているのか。そういったデータがあるのか、そういうのもしっかり突き詰めながら、大きくなったらOKではなく、普通の能力というか、子どもたちは、揉まれて育つものだと思うが、どうしてもそこからこぼれてしまう子どももたくさんいると思うので、そこをフォローするような手立てをしっかりと、統合した分、余裕が出るのではないかと思いますので、そういった対応をしていただけたらと思う。先ほど2つ学校のビデオを見せていただいて思ったが、ICTを使ってある程度解決できることもあるだろうし、空いた教室など子どもが減るといったことは余裕が出ると思うので、その辺を柔軟に運用しながら進めていただきたいと思います。

《C委員》

私の子どもはスイミング教室に行っており、複式学級に行っているお子さんと一緒になることがある。うちの子はロッカールームにぱっと入って着替えたりするが、その子はなかなかロッカールームに入れない、入ってもたくさん的人数が着替えているため、なかなか中に入っていけない、すぐ出てきてしまうことがある。そういうことがあってお母さんからなかなか離れられない。同じ学年だが、そういった差がすごく、学校の中のやり取りだけでなく、外に出ても複式学級のお子さんは他者との交流が難しくなることがあるのかなと思う。大人数で、たくさん居すぎるとしんどいと思うが、適正な人数で学校生活を送ることがすごく理想だと、そういったところで思う。数字だけ見ていると、港西、港東は統合する、奈佐も五荘と統合するという方向性になっているが、竹野の方がすごく気になってはいるが、先ほどの委員のお話や、今でも長い距離を通っている子どもさんがおられるということで、少し納得する部分もある。統合すると距離が遠くなるお子さんがたくさん増えると思う。その分、親もバス通学に対して不安に思う方もおられると思う。そのため、バス通学になったらどれくらいの距離がある、時間がかかるのか、具体的なども、おおよそでいいので考えていった方がいいと思った。

《B委員》

今後、今までの学校教育が変わってきて、ICTや英語など入ってきて、ある程度の規模がないと難しいのかなと思うところがある。別の観点として、豊岡市のコミュニティが小学校区を単位としていることが非常に難しいところかなと思う。単純に数字だけ見ると、奈佐小学校は五荘小学校から児童をもらえばいいじゃないか、中筋小学校は八条小学校から校区を分けてもらえばいいじゃないかという意見もあると思う。しかし、文化という観点で非常に難しいと思う。奈佐小学校は、こういう意見は出てこなかったのか。いくつか地区を分けて通わせてく

ださいとか。そういう意見は出てこなかったのかと疑問であるが、暴論だとは思ふ。もしこれができるなら簡単だなと思うが。

《会長》

選挙区などは、見直しがあるが、やはり学校区の見直しは難しいものがある。

《J委員》

先ほどの補足で、統合に動く前に、それまでに統合された清滝小学校、西気小学校の当時の会長さんにお会いして、どのような問題があるのかということを知りたいと聞いて動いた。ただ単に気持ちだけで行ったわけではなく、いろいろ調べてどうすべきか考えて行動したということも補足させていただく。

中学校の部活動について思うところがあって、私の時は当たり前のように運動部がいくつかあって、文化部もいくつかあって、自分がやりたい部活動に入って、部活をするためだけに学校に行っているんじゃないだろうかという時代であった。しかし、私の住む地域の中学校ではもう選択肢がない。男子はテニス部か吹奏楽部のどちらかをしなさいという状況。やりたいわけではない部活動に仕方なく入らなければならないという気持ちと、自分からやりたいという気持ちとでは、3年間活動する中での色々な意味での成長に問題点が起きるのではないかと思う。成長する上で、人間形成をする上で一番重要な部分を得られるものが部活動であると思うが、選択肢がないことで問題が起きるようなことがあってはならないと痛感している。その辺も、この適正配置の中でも審議していただき、結論を出していただけたらと思う。例えば、中学校単体で無理であれば、近くの中学校と共同だとか、いろいろな方向性があればと思う。もちろん1つになるという方向も。今年の動きの中で、小学校だけの統合だけでなく中学校の統合も議論したので、それが実現できるような動きになれば尚よいと思う。

《M委員》

竹野では、竹野認定こども園から小学校に入学するとき3つの小学校に分かれる。こども園時代に一緒に学んでいた子と小学校で分かれて、中学校でまた一緒になるという、少しいびつな形になっているので、統合に向けて動いていく時期なのではないかと強く思う。竹野にはもう1つ、竹野小学校の校舎の老朽化により、新たに校舎を建てなければならないという問題がある。この説明会が12月にあり出席したが、建て替えの場所について、現在地にするのか竹野中学校の敷地内にするのかという問題で、PTAは小中一貫教育ということで、子どもが減っているという観点から中学校敷地内がいいのではないかと意見をまとめておられたが、ご年配の方がとても元気が良く、その会議では、9割方は区長さん方が発表されて、うちの区に小学校は必要だ、昔からある学校だから竹野の真ん中にないかと困るとか、それが強く出ていて、PTAが発言されたのは会長が1名だけ。「主役は誰か、子どもですよ」ということをもう一度、地域の方に教育委員会から強く言っていただいてもいいのではないかと思う。もちろん母校がなくなるとか、悲しいという思いは分かるが、複式学級の映像を見ていただいたりして、もう一度、現状を考えてもらえるよう、教育委員会がリーダーシップをとって強く言っていただけたらいいと思う。子育て世代は、毎日がとても忙しい、必死に生きている。そのため、一度その環境になじむと環境を変えたくない。入学してしまうと卒業までこのリズムで行

きたい。現小学校に通っている子の親は、うちの子どもの代ではいいから次の代で考えて、という気持ちが強い。建て替えの件と、3校統合の件は、同時に行って欲しい。引っ越しは少なくして欲しい。塾や習い事も30分かけて通っている方も結構おられて、みんな必死に生きているなど思う。それに加えて中竹野小学校で天井落下の事故があって、まだ1年生と6年生は自分の教室で授業ができていない。こういう状況を見ても、すぐにでも踏み出さないといけない時期ではないかと思う。中学校の部活の話が出たので、それに対する意見だが、子どもがある競技を習っているが、中学校にはその部活がない。よい指導者がおり、県大会や近畿大会を狙っていきたいという強い気持ちを持っていたため、部活動の取扱いについて学校とも相談したことがある。部活動もアウトソーシングしてもいいと思う。学校側がこの教室は部活動相当と認めるといふ活動をしていたら、学校の先生の負担も楽になると思うし、地域の方とのつながりも深くなるので、Win-Winの関係なのではないかと思うので、今後そういった議論をしていっていただけたらと思う。

《N委員》

先日、いただいた資料を見た感想としては、少子化、人数の減り方が恐怖であった。港認定こども園では、園児が去年から10名減って、すごく減ったと思い、在宅のお子さんがどれだけいるかと聞いてもあまり増える人数が地域の中にいない。このような状況で保護者の方からは、「都会からお嫁に来たがこんなに人数が少なくなっていく所だとは思わなかった」という話をきいた。だから、PTAで一生懸命に統合に向けて動いてくださるのをとても感謝されていた。これが、少子化の園として現場の実感である。今日ビデオを見せていただいた中で、教育長がおっしゃったとおり、あの授業の状態の中で自分のペースで学べる力のある子がどれだけいるのかと思ったときに、園の中でも支援の必要な子がたくさんいる。注意欠陥の特性を持つ子や、全ての情報が入ってしまい自分で情報の整理できない子、今、自分が何をしているのかわからないというお子さんが年々増えている中で、複式という環境は厳しい状態だと思う。人数が少ないから目が向くといいながらも、目が向きすぎてしんどくなるお子さんもたくさんいる。大勢だと、ここはスルーしてもらえるといる所が、常に見られているのがしんどいと感じるお子さんもとっても増えている。複式はできれば避けていかなければならないと思った。非認知能力の話も出ているが、0歳から非認知能力の芽は育つ。ただ、家庭の中で、お母さんと、お父さんと、家族と、1対1で非認知能力の芽を育てていく期間ではあるが、教育指針というものがあるが、その中でも3歳からは仲間を目を向けていく、友達と関わっていくということがしっかりと明記されている。就学前だが、3歳から仲間づくり、関係づくり、その中で自分がどんな力を発揮していくかということが大事だと思っているので、小学校は尚更、人との関わり、人の意見を聞く、人に意見を言うことが大事だと実感している。

《D委員》

この適正規模を確保していくという流れはその通りだと思う。ただ一方で、ある程度の人数がいるということのメリットと、少人数であることのメリットと、両方を兼ね備えた形にしていけたらと思う。特に未就学の子どもたちの中には、家庭状況や本人の特性によって1対1で

関わりを増やしていかなければならないお子さんが、ここずっと増えている。そう考えると、少人数であることのメリットにも一部しっかり目を向けておかないといけない。今回、コロナの対応がある中で、これが一過性のものではないということも考慮に入れておいて、今後このようなことが起こった時に子どもたちにとっての居場所、教育を止めることがない、災害や今回のような形で止まることのないように、せつかく適正規模・適正配置の検討をするのであれば考慮していただきたい。この審議会で言及することではないとは承知しているが、学校の統廃合と、プラスアルファとして、今までの教育のあり方が、今後の非認知能力を高める上で、目標としているいろいろな形が教育委員会で見出されているが、やり方について、同じ授業のやり方でいいのか、本当にこれが必要な学校行事なのかを含めて考えていく、その中で運動会が本当にいいのか、部活動は今のやり方でいいのか、そういったことも含めて統廃合の検討事項の中に入れていく。そして、その中でデータが非常に重要だと思う。内外でいろんなデータがあると思うので、その検討事項に応じたデータをご準備いただき、検討いただけたらと思う。

《委員》

但東中学校区では、小中一貫教育で年に10回ほど、3小学校の6年生が中学校に集まって授業をしている。その様子を見ると、子どもたちは多人数の中で学びたいのだなという事がよくわかる。それぞれ子どもたちは楽しみにしているが、職員は、年10回とはいえどもなかなか大変であり、この行事を少しでも削減したいと思うのだが、しかし子どもたちは非常に望んでいて、保護者の皆さんもなんとか続けて欲しい、子どもたちは多人数の中で過ごしたいと思っているということが一つ。それから、但東中学校は現在83名、16年前に統合したときは200名弱。15年間で半数以下に減っている。今回資料を見させていただいて、今後10年後には半数、さらに10年後には半数。今、83名で少人数だが、1クラスに30人ほどいるので、多様な意見の中で学習ができていく。しかし、部活の話を見ると、野球部は単独ではチームを組めないことが数年続いていて、去年は竹野中と、部員のいないところと一緒にチームを編成する、非常に無理な形になっている。剣道部は団体が組めない。音楽も多人数の演奏ができない。多人数の中で活動したいというニーズに応えることが難しくなっている。そういった中で、部活の中で育っていくべき社会性などが、この状態で育っていけるのか、厳しいものになってきているなど思っている。今は83名だが、今後10年後に50人を切ってくると、1クラス15人程度になってくる。果たしてクラスの中でも多様な活動ができるのか心配になってきている。こういうことを考えると、中学校だけの問題ではなく、但東町自身の教育の問題として、適正配置としてこの中学校が存続できるのか、というところに話がいくのではないかとと思う。今の但東中学校でも、登校距離は、高橋地区も資母地区も遠い子で12kmを超えている。国の基準からすると6kmを超えていて、校区でいえば豊岡市内で一番広いのではないかとと思う。とはいえ、これを例えば出石に持って行くなどとは考えられないのではないかとと思う。但東町に中学校を1つ残そうとしても、自然減少により20年後には存続が不可能になってくる。ましてや、小学校の少人数化などを考えていくと、加速されて行き、20年後には子どもがいなくなるのではないかと危惧している。スピード感を持って再編などをしていかなければ、その地区に学校が存続できないのではないかと、強く危惧している。ここで指針を出していただいて、配置、それだけではなく、部活についてはどうするか、そういうことも含めた提言をし

ていかなければならない。現状維持を少しでも伸ばしながら、自然減少を少なくできるような施策を豊岡市がされている。コロナも、もしかしたらチャンスになるかもしれないとも思っている。小規模校は密になりにくいので、今の時代に合った環境の中で教育ができるという意味ではチャンスで、このチャンスをなんとか受け入れながらいい教育ができればと思う。

《P委員》

これまで複式の現場も見てきたが、複式学級、極小規模の学校のメリット、デメリットはやはりあると思う。メリットとしては、一人ひとりに目が行き届くので、基礎学力の分野では定着させやすい。ただ、私は、子どもは子どもの中で育つと思っているので、そういう観点から見ると圧倒的に人との関わりが少なく、たくましさ、切磋琢磨する場面が少ない、そういう課題が残っている。少人数の問題点として、人間関係が固定しやすい、小学校の6年間だけでなく保育園から続いていることがあげられる。固定化された人間関係の中で、子どもたちが育っている。いろいろな取組をするが、固定化された部分が崩せないという現実もあると思う。先ほどからも出ているが、多様な意見や考え方が出にくいということもある。また、目には見えないが、運動量を確保しにくい。ボール運動をするとき、チームで対戦するゲーム形式のものは、ほとんどできない。そういった中で育つ能力というものもあると思う。竹野は小小連携で3小学校が集まって、年に5日間、竹野小学校で過ごす取組を10年間くらい続けているが、初めてここでゲーム形式の運動をすることになる。明らかに動きが違う。ボールの投げ方も違う。そういったことを早くに保護者に伝えられたら良かったと思うが、そんな場面を見ていただく機会もないので、そういうことが分からないのかなと、そういった点もある。学力は先ほどから出ているが、教科書で学べないこと、これから特にそういった能力が、多様性の中で培われなければならないと思うので、そういうことを考えると適正規模というのは大事ではないかと思う。今、竹野小学校は20人前後の単学級で小規模校ではあるが、ちょうどよい規模なのかなと思っている。今一番していかないといけないことは、そういうことを保護者や地域の方にどう周知していくか、適正というのが周知されていないのではないかということだと思う。子どもにとって学校は教科書で学ぶだけでなく、社会生活の基礎を学ぶとか、そういった観点で考えると、絶対に適正な人数というのが必要ではないかと思う。竹野小学校は建て替えの問題がある。ただ、このことと統合のことは別に考えていきたいと思っているが、地域に学校を残したいという地域住民の想いも大事にしていきたいといけないし、誰のための学校なのか、何のために私たちがこうして話しているのか、そこをしっかりと考えていかないといけないと思う。

《Q委員》

今回の資料の中で一番良かったのはビデオだったと思う。どんな資料を見るよりも、今まで文字では複式学級という言葉がいっぱい出てくるが、実際に見られた方はあまり多くないと思う。ビデオを見れば何となくではあるが、イメージが沸く。そういった意味で、今日は一歩前進かなと思う。各委員の中でも、小規模校のメリットという話があったが、それは確かにメリットではあるが、そのことを本当にメリットと思っておられる保護者がどれくらいの割合でおられるのだろうか。大概が、子どもが大きくなった区長さんとか、そういうあたりから出

される意見であって、果たしてメリットといえるのかと疑問に思う。文科省の手引きにも小規模校のメリットを生かした教育環境の改善について書かれていたが、たとえそれをやったとしてもはるかにデメリット、失うものの方が大きく、メリットがかき消されてしまうのではないかと思う。他校では子どもたちが普通に受けている授業、運動、部活もそうだが、受けたいと思っても受けられない。合同授業の話もあったが、それはそれで意味があると思うが、それは年に何回かの話で、日常的な交流が必要だと思う。これから賛否、意見も出てくるだろうし、地区に説明会に行けば地区からも出てくると思う。その時に、どこに基準を置くのかといえば、子どもの立場に立ってということ。反対される方々にも、あなたたちの子どものころはどうであったか考えて欲しいと思う。昨日、事務局にお願いして、30年前、現在の保護者の年代が子どものころに全校児童がどれくらいだったかを調べてもらった。それでいくと、一番小さいところで55人くらい。それが今は大きく減っている。55人というと、単純に言えば1クラスに10人弱はいたわけだが、30年後には片手になっていることも考えて欲しいと思った。

《会長》

ひと通り皆さん方に意見をいただいた。まとめると、今回の議案については、主役である子どもの学びをベースにするということ。学びは、今勉強することではなく、将来の役に立つものとする、それは非認知能力であり、学校で学ぶものでもあり、いろいろある。ただ、やみくもに経験をさせて学びを培う訳ではなく、ご意見にもあったように、子どもたちのこれからの人生で役に立つものの学びを主役にして今回の適正規模を考えようということ。ただ、それを考えるときには、皆さんの意見を聞いて、ポイントが3つある。1つはデータ重視である。感覚的ではなく、実際に学校はどうなっているか、こういう人数ではこうなると、データを見せる必要というのが1点。2点目は、関係者との話し合い、すり合わせ、これも重視しなければならない。いろいろ意見が出ていたが、地域の皆さんの地域を愛する心、学校があって欲しいという気持ちにできるだけ寄り添いながら意見交換をしていく、それが必要だと思う。データで裏打ちされ、きちんと関係者がすり合わせた丁寧な議論をするということだと思う。3点目は、スピード感である。このチャンスを逃してはいけないという気がする。切実な話もあった。今年度、何とか議論を前に進めて、前向きな答申をぜひ出したいというお気持ちが分かったと思う。

イ 地域別意見交換会の開催方法等について

《事務局》

先ほどあった皆さんからの意見を含め、今後さらに皆さんの議論を深めていただくための研究材料として、地域別の意見交換会を開催しようと考えている。現時点で考えている開催方法の案を紹介するので、意見をお聞かせいただきたい。先ほど皆さんからあったように、あくまでも学校を舞台とした部分では子どもたちが主役ではあるが、地域コミュニティの核にもなっていることから、地域の皆さんにも意見をお聞きする必要があると思っている。開催時期は9月中旬から10月末を予定している。開催方法は対象者を児童生徒未就学児の保護者を第1段階として9月中旬から始め、その意見がまとまった段階で、その意見を持って地域住民を

対象に同じように説明していくことを考えている。この中で、保護者の意見はこうですという形で紹介させていただこうかと考えている。開催地域は旧市町ごとで、城崎と港は一括して開催する予定にしており、6地域×2回ということで、12回、意見交換会を開催したいと考えている。内容は、子どもの数の推移と教育課題についてであるが、皆さんからビデオが衝撃的であったという意見を多くいただいたので、ビデオ視聴についても検討したい。また、昨年教育懇談会を開催したときに、「もっと踏み込んだ議論ができると思っていた」という意見もあったので、今回は踏み込んで、大まかな統合の案等も提示した上で意見交換ができたと思う。先ほどからあったように、地域の方の意見が大きくて、保護者の方が発言しづらい、保護者と地域の方とで一緒に意見交換をすると、初めに発言された方の意見に流されてしまい、反対意見がなかなか出せないということも出てくるかと思うので、今回は、学校教育、学校環境について一番の受益者である児童生徒の保護者、あるいは将来の受益者である未就学児の保護者に対して意見交換を行い、意見を集約させていただく。その上で、保護者の意見を持って地域に入っていく形で、少しでもたくさんの意見を聞けたらと思っている。もう一つ、3密の回避ということで、少し分散させることで会場の密度を減らして安全性を確保していきたいと考えている。その他、意見交換の後で、もう一度話を聞きたい、もっと踏み込んで話がしたいということがあれば、その地域に合わせて座談会や説明会等を開催させていただく。こういった方法で意見交換会をさせていただきたいと考えている。次回の審議会で大まかな枠の案についても提案させていただき、意見をいただけたらと思う。日程調整はこれからだが、皆さんもぜひ参加いただき、意見をいただけたらと思う。

《会長》

地域での意見交換会は今回の審議会の議論でも非常に重要な、大切な内容になる気がする。ぜひ皆さんも関係する地域に出ただけけたらと思う。内容等については次回審議会で枠組みを示されるということなので、こうしてはどうかなど意見があれば、事務局に申し出ていただけたらと思う。

以上

7 冒頭 教育長挨拶

2月3日に1回目があり、2回目を4月の終わりにと考えていましたが、このような状況でいつできるかと心配していました。今日から通常通り、計画を少しタイトにして、年度内に答申ができるようお願いしたいと考えています。

学校が6月1日から再開しました。1か月経って7月に入り、休校を2か月やっってはっきりわかったことがいくつかあります。一つは、学校はとても大切なところであるということです。食べ物もそうですし、勉強することもそうですが、子どもたちは何よりも、友達や先生たちと一緒に勉強したがつている、このことがはっきりと分かりました。2つ目として、家庭の影響がすごく大きいことが分かりました。しっかりと食事をしている子、しっかりと生活習慣ができていない子、この差がものすごく大きかったと思います。3つ目は先生です。先生は子どもがいてこそ成長できる。このこともはっきり分かりました。

豊岡市は、2か月間子どもたちがどうしているのかを気にかけていました。校長先生方から、家庭訪問での子どもたちの様子について聞き取りをすると、食事がうまくいっていないとか、ストレスのたまっている子がいる、とのことでした。そういうことをはっきり確認する必要があるので、全ての小中学校の保護者に対しWEBで調査をしました。食事はどうなのか、運動はどうなのか、学習の状況はどうなのか、ストレスはどうなのか、このような項目についてですが、約70%の方から回答がありました。その結果、かなりストレスが溜まっているということがわかり、心配し、県の方針とは違いますが、但馬地域で感染者が発生していないことを背景にして、独自に豊岡市は登校日を設けることとしました。

登校日には、子どもたち自身にどんなストレスがかかっているかをチェックしました。そうすると、睡眠は通常に比べ3割が乱れている、家庭学習の習慣も2割から3割リズムが崩れている、身体的に不調を感じている子が27%から48%ありました。むしゃくしゃしたり、イライラしたり、カッとしたりするようになった割合は小学校が17%、中学校が20%でした。様々なストレスの状況を考えて、6月の1か月間はゆっくりしよう、そろりそろりと歩みだそうと学校と相談し、ストレスチェックで引っかかった子、すぐに対処しないといけない子はカウンセラーを派遣してカウンセリングをしたり、家庭に連絡をして相談したり、そんなことをまず中心に行いました。学習は後からでいいので、まずは落ち着くことだという風に考えました。まだ1か月なので、学校から大変な状況だという報告はありませんが、少し時間がかかると思います。しっかり、ゆっくりとみていきたいと考えています。過去の経験ですが、東日本大震災の後、不登校、いじめが増えたと言われていました。ニューヨークの同時多発テロの後も子どもたちの生活が、大人による社会情勢の不安感の中で学校が荒れたという状況があるので、油断をせずに、まず子どもたちのいる場所でどんなことが起きているのかをしっかりと掴んでいきたいと思います。学校の意義が分かったということです。

2つ目の報告ですが、お手元にとよおか教育プランの冊子が入っています。教育プランの表紙に、サブテーマとして、非認知能力（やり抜く力・自制心・協働性）を子どもたちに、というふうに書いてあります。これは、皆さんに適正配置の審議をしてもらうのに大きく関与している内容です。この教育プランは、今年から5年間の基本方針で、それをテーマにしながら各年度どういう教育施策をするのかを展開する、その基本になるものです。非認知能力という言葉はなかなか聞きなれない言葉かもしれませんが、今後5年間、豊岡が最も大切にしたいこととしてテーマに

しています。このことは、元々、子どもの貧困対策で考えたことです。全国の学力調査があり、社会的背景、つまり家族の収入や学歴などと、学力とは相関関係があると、ずっと言われていました。それを3年前にある大学に委託し、研究してもらったところ、そのことがはっきりと分かりました。一方、貧困家庭だとしても一定の学力を持っている子もいるということが分かりました。貧困とか、社会的背景が低いのになぜ学力が高いのだろうかということを調べていくと、がんばり抜く力であるとか、みんなと協働する力であるとか、自分のことをコントロールする力とか、こんなことが備わるような働きかけや声かけをしていることが分かりました。先ほど言ったようなことは、テストの点数で算数が何点、国語が何点とかという、テストの数値には表れない非認知、認知することができない力であって、それは認知できる学力よりも、もっと大切だということが分かりました。ですので、学力もさることながら、豊岡の子どもたちにこの非認知能力をつけるのが大切であるということで、今回、テーマとしています。このことは、座って学習するのではなく、友達と話し合いながらすり合わせをする場面とか、あるいは学習したことや自分たちが話し合っただけの決めたことをどこかで発表する、プレゼンする、演劇をする、ダンスをするなど、そういう外向きの、アウトプットする力でこのことが育成されることが分かってきているので、こんなことをいろいろな場面でやっていこうというふうに考えています。その時に、少人数ではなかなか効果が出ません。ある一定程度の人数があったり、グループがあったりする中で、多様な意見に触れながら、「そうかな」、「どうかな」、「ああでもない、こうでもない」と考えながら非認知能力が育まれていく。そのため、適正化というのは、子どもたちの環境を良くするために必要なことであり、教育プラン、いわゆる教育の方針と教育環境は密接な関係があるものです。これから審議をしていただくうえで、このことを踏まえ、よろしくお願いします。